

## ふるさと納税と江東区の未来

私が所属する野球クラブチームがいつも練習で使っている「江東区夢の島野球場。」かなりグランドが老朽化していたが、昨年グランドが新しく整備され、イレギュラーバウンドが減り、プレーに一層集中できるようになった。前山崎江東区長や国會議員の先生方がよく大会の開会式に来てくれていたので、きっと税金で改修の手配をしてくれたのだと思う。

一方、家に帰ると、時々見慣れないものが置いてある。ある日はブランド米の袋。またある日は、有名メーカーのゴルフボールやクラブ。これらは、父が「ふるさと納税」という制度を利用して、全国の自治体から取り寄せた「返礼品」だ。父は嬉しそうに「これ、実質二〇〇〇円で貰えるんだ」と言う。しかし、夏休みの課題で税について調べるうちに、私は何か変だと思った。父が利用しているふるさと納税は、本来私たちが住む江東区に納めるべき住民税の一部を、他の自治体へ寄付という形で移す仕組みだという。つまり、父が返礼品を受け取って喜ぶ一方で、私たちの街、江東区の税収は減ってしまっているのだ。寄付を受け取る地方の自治体にとって、ふるさと納税はまさに恵みの雨であるが、私たちの街では何が起きているのだろうか。「五四億円が消える街、江東区」調べていくうちに、私は衝撃的な数字に突き当たった。五四億円と言われても大きすぎて、中学生の私にはすぐ理解できない。しかし、江東区の広報資料によると「これは学校一校の建て替え費用などに相当します」と書いてある。ちょうどこの前、東雲小学校の改修が始まった。有明中学校のエアコンも壊れている。そして、冒頭で触れた夢の島野球場の改修も、すべては江東区の税金で賄われている。もしこのまま税収が減り続ければ、いつか「予算がないから改修は先延ばし」といった事態が起こらないとも限らない。

ふるさと納税について調べてみて、私は一つの結論にたどり着いた。この制度は、地方を元気にする「光」と、私たちの住む街の体力を奪ってしまう「影」の側面があるということだ。どちらか一方が正しくて、もう一方が間違っているという話ではない。

中学生の私にできることは、江東区がどんな魅力を持つていて、そしてどんな課題を抱えているのかを知ること。その上で、税金がどう使われるべきなのか自分なりに考え、家族や友達と話をしてみることだ。それが、私にできる具体的な行動だ。

## 見えない応援団

「ペラッ」静まり返った図書館で、私は教科書をめくっていた。夏休みに入り、本格的に受験勉強が始まった。私はよく勉強をしに図書館に行く。家だとテレビの音やスマホの通知が気になつてしまふけど、ここに来ると集中することができる。整った机と椅子、ほどよい空調、そして静かな空間。図書館の中にいるだけで、「頑張ろう」そう思える。

でもある日ふと思つた。この整った空間は、どうやってつくられているのだろう。エアコンの電気代、机やイス、本にかかる費用。どれもきっと沢山のお金がかかっているはずだ。気になつて調べたら、「税金でつくられているんだ」そう気づいた。その時、「繋がり」を感じた。私がいつも勉強しているこの場所は、誰かが働いて納めた税金によつて支えられていたのだ。

思い返してみると、分からぬ問題があつたときに見る教科書も、税金でつくられている。私たちは当たり前のように教科書を受け取り、毎日使つてているけど、その費用も国が負担してくれている。もし税金がなかつたら、教科書を自分たちで買わなければならず、経済的な理由で勉強のスタートラインに大きな差が出てしまうかも知れない。

さらに、学校の建物や水道、先生方の給料や当たり前のように食べている給食にも、税金が使われている。私たちが安心して学校に通い、落ち着いて学習できる環境があるのも、税金のおかげなんだと改めて実感した。

私は今、受験生だ。未来の選択肢を増やすために勉強している。合格までの道を進むためには、自分の努力だけでは難しい。税金という形で、社会が私を応援してくれている。それに気づいたとき、感謝の気持ちがこみ上げてきて、「もっと頑張ろう。」そう思えた。

図書館に通つていると、私と同じように勉強している人をたくさん見かける。小学生も、高校生も、大人もいる。みんなそれぞれの目標に向かつて、静かに努力している。その姿を見る度に、「この空間が、誰にとつても安心して頑張れる場所であつてほしい」と思う。

私も将来、社会人になつたら税金を納める側になる。そのときは、今支えられている税金に恩返しするつもりで、税金を納めたい。そして、今の私のように何かに挑戦している誰かの力になれたら嬉しいと思う。

税金は、ただのお金ではない。誰かの夢を支える、見えない「応援」の形だ。その応援に支えられながら、未来の自分と、そして誰かの未来のために、私は今日もページをめくる。